

『ピバ！エル・テアトロ！』 主として西女書評一覽

- ① 「佐野碩と三好十郎」田中覃之（『大正演劇研究』月報二六、一九八九・二二・二）
- ② 「ピバ！エル・テアトロ！——炎の演出家佐野碩の生涯」栗山淳（『BUC』三省堂、八九・一二・一五）
- ③ 「プロレタリア演劇家の全生涯を初めて明らかに」小田切秀雄（『文学時標』第三九号、一九九〇・一・一〇）
- ④ 「知られざる側面に光」菅井幸雄（『赤旗』九〇・一・二九）
- ⑤ 「佐野碩の足跡たどる」中村青史（『熊本日々新聞』九〇・二・一九）
- ⑥ 「メキシコ現代劇の父」曾田秀彦（『図書新聞』六七八号、九〇・二・二四）
- ⑦ 「芝居の鬼の軌跡」（『毎日新聞』九〇・二・二六）
- ⑧ 「メキシコ演劇に貢献した日本人」佐藤忠男（『週刊読書人』九〇・三・一二）
- ⑨ 「佐野碩の生涯を本に」（『人吉新聞』九〇・三・一四）
- ⑩ 「ピバ！エル・テアトロ！——炎の演出家佐野碩の生涯」栗坪良樹（『国文学』九〇・三・二〇）
- ⑪ 「ピバ！エル・テアトロ！」を讀む「横手一彦」（『農民文学』二二三号、九〇・四・一五）
- ⑫ 「ピバ！エル・テアトロ！」藤木宏幸（『社会文学』四号、九〇・七・一〇）
- ⑬ 「演出家の軌跡」武田清（『労働者文学』二七号、九〇・七）

徳永直の戦争文学

中村 青史

戦争によって死んでいった人への挽歌が戦争文学であり、それ以外は単なる戦争ものである。

1

戦争は、徳永直からも愛する者たちを奮い去った。昭和一七年三月二六日、弟吉男がフィリピンのルソン島サンフェルナンドの野戦病院で死に、昭和二〇年六月三日に妻トシヲが空襲下の東京で病死し、同年六月一四日、弟寅雄がこれもフィリピンのネグロス島で戦死した。徳永直は、小説の戦後第一作として、『新日本文学』創刊号から「妻よねむれ」の連載を始めた。最愛の伴侶であったトシヲへの挽歌「妻よねむれ」は、「お経を讀んでやるつもりだが、まる三年かかって、やっとおわった」と記されたように昭和二三年一〇月一五日の『新日本文学』で終った。その間、妻トシヲの病氣と死を描いた短篇「敗戦前」が雑誌「人間」（昭和二一・六）に発表されている。そして「妻よねむれ」の最終回の少し前、すなわち七月一日の『社会』（三巻七号）に、「にがい唾」が、八月一日の『新潮』に「風のない日」が発表された。戦死した二人の弟のことが素材であった。

2

「にがい唾」は、第二次大戦で戦死した末弟が、まだ日中戦争時の昭和一五年に除隊帰国し、戦友の遺品を遺家族のもとに届ける話を経糸として描かれた作品である。冒頭に昭和一五

年九月に、作品が東京新聞に書いたという「弟のこと」という一文の一部分が置かれており、これは徳永の戦時下の情勢の言ひ訳的弁明のような気もしいではないが、末の弟に対する作者の並々ならぬ愛情の吐露でもあり、何よりも、当時の言論統制下にあつては書けなかつた部分だ、これを引きあいに出すことによつて、明かされていくという筋合ひなのである。

「私」は「まだ市電の少年車掌だつたころの、あどけない顔など、きのうのようにおぼえてゐる」のだが、今「私」の家の玄関に立つた末弟を見た瞬間、「私はぎよつとした。おぼえのある幼な顔はまきれなくわらつてゐるのに、眼だけはとびかかりそうに光つてゐる」のだった。「汽車がこんだでしよ」と女房がたずねると、「ふん。いっばいだつたナア、ところが、自分が腰かけるところにや、だマれもこんたい。片っばあけとくばつてんが、だマれもこんたい。腹がたつけん、ねてきた——」と答える。夕飯の時、子供たちをわらつてみせるが、下の方の子たちはこわいとさけんで母親にしがみつく。嫂として古くから末弟を可愛がつていた女房も「〇〇怖いわねえ、寅雄さんは」と言ひ、「あの刀で、九人斬つたんだつて、幸一に鞘をぬいてみせてたわよ」と「私」に言ひ、「寅雄のこわい眼が、そこに原因があるかのように。遺品の話からその持ち主だつた秋山という補充兵について語られる。秋山一等兵は捕虜になつたのであつた。「だいたい、学生坊主の補充兵は、あぎやんとこへ、連れてくつとが無理たい。自分どんがごたる兵隊でちや、あんときや命からがらだつたもんナ——」末弟は不機嫌に言ひ、「しかし彼はこの秋山に何か親しみを持つてゐた。「秋山一等兵は、早稲田の学生だつたという。ハモニカが上手で、西洋音楽に明るく、どつか町につくと、「中央公論」とか、何とか、雑誌をめぐつてきた。末弟もいつもそれを借りて読んだというよな話もした」のであつた。遺品をとどけに行く末弟を案内して「私」は日本橋まで行くことになつたが、途中神宮外苑や靖国神社をまわる。その間「私」と末弟は、戦争についてそれぞれの思いを抱きながら、それをはつきり口には出せず、「共匪はつよかナ」「大和魂よりか、よつばどつよかばいた」と末弟、「八路軍はピラをまくそうじやないか、お前みたか？」とかみ合わない会話を交しながら歩いている。やがて問屋町の老舗らしい店に着く。「秋山が家は、ブルジョアばい

な」と、プロレタリア出身の末弟はつぶやく。秋山一等兵の妹と兄が姿を見せるが、二人ともそわそわして落着かない。父親は病氣だと言つて二階から降りて来ない。秋山の兄は、末弟が用件を喋り出そうとするのを押えた。「まったく申訳ないですが、あの、店の者へきこえますので——」「公報は、すこし前に参りました。それで、その、行方不明などと、いうことが、若しかほかにきこえますと、なにぶん、店の者も大勢おりました——」と弁解し、二人を店の外に連れ出し、銀座通りのある洋食店の二階へ案内する。そこで末弟は、秋山一等兵がいわゆる行方不明になつたいきさつを、事実だけを軍隊調で報告する。「私」はその間常に秋山の兄なる人の表情を観察する。秋山の顔は終始こわばつたまゝであつた。外へ出て、電車道へ出たところで秋山の兄さんとわかれたが、末弟は「秋山の野郎、むぞ（むごたらしい）なげたい」とつぶつぶ言ひ、「ばからしか、郵便でおくつてやればよかつたな、兄さん、」と言ひ、「私も同感する。同時に「同感できることが私にはにがい気持ちであつた」と思ひ、「砂利のまじつたよなつばを吐いた」のであつた。

以上が「にがい唾」のあら筋であるが、秋山の家を訪ねていつたその終わりの部分から、もう一度始めの部分に返つてみたい。

その末弟も、いまはレイテ島で戦死して亡い。昭和二〇年六月の十幾日というのであつたから、公報があつたのは終戦後半年あまり経つてからだつた。公報のことを知らせてくれたのは、末弟の二度めの出征当時、まだ腹のなかにいた赤ん坊と加えて、二人の子供をつれ、大分の実家にもどつてゐる弟嫁からであるが、最初のうちは、終戦後よくあつた、公報がきても生きていた、という伝えで、弟嫁も私も、それを空頼みにしてゐたが、さらにまた半年ばかり経つて、末弟の戦友だつたという帰還者から、弟嫁の方へ報告があつて、いまはそれも切れた。

戦場で死んだとの知らせが来ても、もしや生きて帰つてくるのではないかとの一縷望みをも

つ家族、この素直な感情が、戦争が終つて自由がよみがえったときは出せたのだが、十五年戦争の半ばでは、秋山の家族のように、その感情すら隠さなければならなかったのである。弟思いの作者が、兄としての秋山の兄の立場を、プロレタリアとブルジョアといった生活環境の違いを超えて、何とか理解しようとする。「私」を設定している、その背景に思いをいたす。

昭和十年代は、徹底した私小説の時期といえると思うが、その一連の徳永私小説の端緒を開く作品に「冬枯れ」がある。昭和九年二月『中央公論』に発表された。転向弁護の作品として嫌う人もいる。小林多喜二が虐殺された昭和八年の九月彼は日本プロレタリア作家同盟を脱退する。その年二月下旬から翌年一月にかけて法要のため帰郷したが、その折りのことを作品にしたものであった。

昭和六年一月二日から一四日にかけて天皇を迎えての陸軍特別大演習が、熊本市を中心に展開されたが、それに先だつて労働争議の指導者や無産運動家等百人以上が検挙されていた。その中には徳永直の後継者の無産運動の仲間たちもいた。「冬枯れ」の中では、三・一五事件で拷問にあつて発狂したり、熊本市電争議で拘留されそれがもとで病死したりした仲間が描かれているが、M君や米屋の娘愛子などは生々しい現実を背負っていて、陸軍特別大演習が華かな一面のみ語り継がれていく熊本にあって、その犠牲者たちの存在を垣間見せている。ところが、そこに少年車掌の末弟虎吉が登場する。「にがい唾」の末弟寅雄と同一モデルである。彼は実に明るい少年であつた。猩紅熱で避病舎に隔離された寅子の付添いをしてる鷺尾のもとに、弁当を届けにやつて来た場面である。

「どうしたんだ、今日は？」

はじめて弁当をもってきた末弟は、いつも嬉しそうにしている顔をよけいニコニコさせて、

「公休したい、月に一度の公休したい」

「哀れなるかな少年車掌——と、おしまいの方は唄のよううに言つて弁当箱をカチャツ

とおいてちよつとも哀れそうでない笑い声をたてた。

この若者には少しも屈託がなかつた。いま非常に調子のたかい、こんど出来たという第XX回の軍歌を唄つてるかと思つと、非常にハッキリした階級的なことを話す。鷺尾が内心駭いてるのは、この若者には一寸も左翼がったところがないこと、ちよつとも不自然でないことだつた。その癖何でも知っている。兄貴に訊かれれば非常に明確に自分達の勤務状態などについて、たとえ、ダイヤが非常に強化されたこと、自分は五年も勤続して既に少年ではないのだが、依然として七拾銭の賃銀であること、近頃では交代が少なくなつたので一日に一度は、弁当を車掌台に突つたまま食わなければならぬこと等や、また土地で起つた共産党事件についてもびっくりするほどよく知つていた。

「それで、そんなにヒドくて、お前達の共済会は黙つてるのかい？」

「はア、黙つてる」と答えた。

「でも、ボンヤリしてりや益々真面目な分子は減つてゆくじゃないか？」

鷺尾が畳みかけると、微笑している無邪氣そうな目の中を、おそろしく老(ま)せたものが一瞬キラリとよぎつたと思われた。「はつてんが、負ける戦争は出来んもん——」

窓外へ出ると、子供に絵本を読んできかせている虎吉の若々しい声がかきこえてきた。——
そこで、のらくら上等兵は——。なんとという図太さだ！ 何という「働く者」の図太さだ！黄色い朝日のなかに音をたて、崩れていく足許の霜柱をみつめながら、鷺尾は呆然とたちすくんでしまった。——

この図太く明るい労働青年の虎吉が、戦争を体験することにより、「にがい唾」の虎雄に変わったのである。「冬枯れ」の鷺尾は、自分が革命的戦列から脱落していくがゆえに、せめてこの弟に明日を託する気持ちは切実であつた。その思いは作家徳永直に昭和十年代を生きる支え

でもあったはずである。徳永は兄弟の中でもこの弟をもっとも愛していた。弟が若妻と子どもとさらにお腹の中の子どもを残して二度目の出征が決まったとき、直は彼等宛に次のような手紙を書いている。

昭和十八年十二月四日 連達

東京都世田谷区世田谷三二四一五 出

尼市北薙波町二二一 住友甲東北寮

社宅徳永寅雄宛

電報みた。

かねて予想はしていたが、やはりおどろいた。熊本へ入隊するのだらうと思うが、そうか？電報は三日午後三時頃につた。すぐ行ってみたくは思ったが、トシヲがこの九月から病氣して、未だにすっかり癒らない。最初の二ヶ月ほどはねたまま、台所から一切洋子と二人でやらねばならなかつた。いまは少しずつ起きられるやうになり、朝晩は台所の指揮くらいやれるやうになつて大分たすかつたが、まだ大体はボクがやつてゐる有様な上に、すぐその日にはなかなか切符が買へぬし、やめた。ユキさんもけさ電報をもつてこちらへきた。とにかく君は二度目だし、古強者だから、そんな事にウ口たへぬだらうと考えるが、たしか咲子さんは産月であつた筈だね。あどどんな風にやつてゆくか？そちらの考えをさつと知らせて下さい。若しそちらでいろゝと都合わるければ咲さんは子供つれで東京へきてゐてもいい。またどちらにしてもいまは汽車旅行が出来ぬだらうが、お産をそちらでするとして、田舎からだれか手伝ひにきてもらへるかどうか？出来ぬならばこちらでユキさんと相談の上、適当に考へてみるが、いそぎ客子を知らせてください。

十二月四日

寅雄様 咲子様

このまま寅雄は帰らぬ人となつた。その後の遺族については、直の書いたものも見つからない。遺品や恩給をめぐつてみにくい争いをする話の「風のない日」の弟は、吉男のことらしい。幾分寅雄と重なつてもいるようだがやはり違ふ。「風のない日」の春雄は、四歳下の秋雄であらう。「風のない日」で戦死した安雄もまた、もとは善良な一労働者であつた。六歳の甥は、安雄がこの子の二歳のととき兵隊にとられそのまま戦死したのだから、父親の顔も覚えていないだらうと主人公中村は思うのだが、「この甥は知つていゝ」といふ。中村はいらだたしく思う。「あんなこわい顔してさ、ひげなんぞはやしてなかつたんだよ。お前はほんとお父さんを見たことがないんだらう」と言う。甥は「ちがわい」と叫んで走り去つてしまふ。安雄の残された娘は、忘れ形見のこの子に「陸軍大将」になつて父の仇討ちをせよと願う「軍国の母」「靖国の妻」なのであつた。

「にがい唾」も「風のない日」も、戦争を体験した人間が、それ以前と人柄が変わつてしまふ人相まで悪くなることを描いた。そしてその人間が愛する弟たちであつたことに、作者の人間性を奪い去る戦争への憎しみがにじみ出る。しかしこの二作に見る主人公の男は何とも臆病なのである。臆病なるが故に、怒りのぶつつけ様を知らない。人間性を殺す戦争の罪悪さを知りつつも、それに反対できなかつた自己の弱さを、この主人公は背負つてゐる。「冬枯れ」ではまだしも救いを「弟」に求めることができた。その「弟」は、もはや遠くへ連れ去られてしまつた。

3

そこに「日本人サトウ」(昭25・7「人間」)に熱中していく徳永直があつた。そして臆病などきつぱり切り捨てた佐藤三千夫の物語りが登場してくることになる。そこでは、はつきりした反戦の思想と行動が展開される。徳永直の中にわたかまつていた戦争に対するじくじたる思いが、ようやく拭い払われるのであつた。まだ本当の「いたみ」がわからなかつたころ、

それは彼が輝かしい労働運動の指導者であった一九二五年に、戦争戯画化とも言える「戦争雑記」という小説を書いていた。それから「太陽のない街」を書き、やがて十五年戦争時代をくぐり抜け、時代は再び、徳永直に戦争嫌悪を素直に語らせることになったのである。

IRRTBと佐野碩（その一）

藤田 富士田力

藤本清一郎と島崎翁助がドイツを訪ずれたのは一九二九年の八月のことであったが、ちょうどその時期に、ATBD（ドイツ労働者演劇同盟）を中心にして、IATB（国際労働者演劇同盟）の創立プランが練られていた。

ATBDは会議を重ねて労働者演劇インターナショナル結成を要望する決議を行って、ヨーロッパ各国の劇団との連絡をとり合う一方で、アルトゥール・ピーク夫人でATBD書記長でもあったマルガレーテ・ローデを、その夏にモスクワに送り込み、全ソ俳優組合、青年労働者劇場（略称トラム）、プロフィテルンなどの代表者と交渉させた。それがソビエト側を動かして、八月末にIATBの創立が決定的なものとなった。そしてモスクワにゲインリヒ・ディアメントを中心とする事務局を設置（一〇月七日）して、各国との交渉に当らせ、IATBの理論骨子を構築するとともに、一二月二二日には評議員を選出するまでに至った。

この間にもATBDは「赤いメカホン」、「赤い鍛冶屋」などのソビエト巡演を介して、トラムとの交流を図り、IATB結成の気運を促していった。さらにドルトムントで催されたATBDの第一回大会（三〇年四月）に、ソビエト、チエコスロバキア、イギリス、日本の代表を招いて、西ヨーロッパ書記局をベルリンに設けるための討議を行った。

このようなATBDの努力が実り、三〇年の六月にモスクワでIATBの第一回会議が開かれることになった。この会議にはアルトゥール・ピークの勧めに従って、千田是也は日本代表として参加した。会議は六月二五日から三〇日まで行われソビエト、ドイツ、チエコ、ベルギー、フランス、デンマーク、ノルウェー、イギリス、日本の各国代表が参加した。

ここでは、事務局長ディアメント、西ヨーロッパ書記長ローデ、ATBDのピークなどの報告を受けて、白熱した討論が重ねられた。千田はその様子を「ピークの報告やレバートリ間